

同居人

2020.10.12

私は教員になってから、2回ほど同居したことがある。若い世代に合わせた表現にすると、ルームメイトとなろうか。

最初は、初任校の玉川第一小学校時代の3年間である。赴任先が決まった私は、張り切って須賀川市でアパートを探した。当時の玉川村は福島空港ができる前でアパートなどなかった。学区にも住みたくはなかった。アパートが決まった矢先、玉川第一小学校の校長先生から電話がきた。「今度学校のすぐ裏に新しい教員住宅ができた。所帯持ち用の住宅だが該当者がいない。すまないが、もう一人の初任者と二人で入ってくれないか」というのである。正直ショックではあったが、まじめな私は渋々承諾したのであった。

玉川村が学校のすぐ裏に新築した教員住宅は、独身者用が2棟、所帯持ち用が1棟だった。独身者用には、川辺小学校の新任女性教員と泉中学校の新任男性教員が入居した。そして、所帯持ち用には、玉川第一小学校の新任男性教員2名が押し込められたわけである。

小学校男性教員2名による共同生活が3年間続くこととなった。学校のすぐ側というのが、いいようでわるいことも多々あった。日曜日の朝である。ゆっくり寝ていたいところに、早くから子どもたちが襲撃してくる。あるときは、子どもたちがふざけて食堂に電話し、「ラーメン10丁お願いします。こちらは教員住宅です」ということがあった。私は、どうせ食堂の人も悪ふざけだとわかるだろうと高をくくっていたのであるが、本当にラーメンが10個も届いてしまったのである。あのラーメンの味は今でも忘れられない。

こんなこともあった。襲撃隊の子どもたちが、どこからか犬を拾ってきた。「かわいそうだから先生飼ってください」というのである。確かに首輪がない。結局、犬を飼うことになった。私が教員住宅にいる間は何とかかなるとして、問題は私が転勤するときである。この犬は、私の実家に預けられることとなった。

余談であるが、この犬は何年か私の実家で過ごしていたのだが、あるとき脱走したそうである。そのまま行方がわからなくなってしまった。しばらくして、私の両親が、自宅からさほど離れていないお宅で飼われているうちの犬を見つけたそうである。しかし、私の両親は、何も言わずにそのままにしておいたとのことだった。

その話を聞き、私も元飼い犬の様子を見に行くことにした。すると、私の姿を見つけた元飼い犬が一目散に私のところに駆けてくるではないか。ちゃんと覚えていたのである。その姿からは、私の両親を裏切った後ろめたさは微塵も感じられなかった。

県教育センターの研修に会津から毎年来てくださる熱心な先生がいた。指導案のやりとりもするようになっていた。玉川村での同居人である先生とは年賀状のやりとりをしていたが、ある年、その年賀状の写真に、その熱心な先生が写っているではないか。そうである。熱心な先生は、私の同居人の奥様だったのである。苗字が「佐藤」なのでわからなかった。同居人の先生とも私が奥会津に行ったおかげで、久しぶりに会うことができた。縁とは不思議なものである。（次号に続く）